

# 近代ホテルにおける「和風」の変遷と その諸相

うちだ あや  
内田 彩 東洋大学  
やまなか さえこ  
山中左衛子 帝京大学  
とくえいじゅんいちろう  
徳江順一郎 東洋大学

This study seeks to elucidate the history of hotels in Japan, in particular, the historical processes and purposes of hotels incorporating Japanese culture. The study reveals that hotels in Japan were already adopting Japanese-style features during the Meiji period, either as part of their design or as cultural experiences, offered as added value for foreign visitors to Japan at the time. In addition, the study shows that with the rise in the number of Japanese customers, hotels also incorporated Japanese-style features into the everyday cultural lifestyles of the Japanese, particularly in ceremonies such as weddings. Therefore, this paper observes that hotels in Japan have developed as spaces wherein the Western style mixes with the Japanese style amid changes in society and in the types of customers.

キーワード：ホテル、ホテルの歴史、ホテルの和風化

Keywords : Hotel, Hotel History, "Japanization" of Hotels

## 1. 研究の背景と目的

和式の旅館に対して、近代化の過程において輸入されたホテルは「洋式」であることが基本であった。しかし、近年では旅館がベッドなどの洋式を取り入れる一方で、ホテルのコンセプトとして「和風」を取り入れる事例が増加している<sup>(1)</sup>（仲谷ほか, 2016）。2018年の「旅館業法」改正では、和式と洋式で旅館とホテルを区別する記述は無くなり、旅館とホテルは宿泊営業として区分されることになった。こうしたことから、旅館とホテルがボーダレス化しているという指摘が相次いでなされている（大野, 2019）。旅館研究においては、旅館とは何か、ホテルとは何か、洋風、和風では明確に定義できない状況が続いており、旅館については、今後どのような方向性を取るのか、重要な局面にきていると指摘されている（内田・高橋・山中, 2022）。

一方で、人々のライフスタイルや感性を重視したホテルは、技術革新により競合他社とのサービスの差別化が難しくなってきた1980年代から出現しはじめ、ブランディング戦略の一環として、貴族文

化や民族文化の香りのするデザインを重視したといわれる（仲谷ほか, 2016）。海外のライフスタイル・ホテルでは、その土地ならではの魅力、体験が差別化戦略の一環となっており（徳江, 2020）、東京のシティホテルにおいても、日系、外資系ともに和の要素をホテルの魅力として宣伝している<sup>(2)</sup>。

ホテルに関する史的な先行研究としては、ホテル通史（村岡, 1981）、ホテル産業の研究（木村, 2006）、ホテル経営の研究（岡本, 1979）、建築史的な研究（初田, 1983）、観光政策の視点からの研究（砂本, 1998）、居留地におけるホテル発展史（澤, 1996a）などから研究が進められている。これらの多くは近代化の流れの中で、いかに洋式を取り入れたのかが焦点になっており、ホテルにおける「和風」についての論考は多くない。ホテルにおける「和風」は、建築技術の受容として論じられているほか、近代の都市施設としてみた日本のホテルの史的研究で、ホテルの概念（勝木・篠野, 1999）、客室、設備などにおける和式（勝木・篠野, 2001）があるほか、1930年代の国際

観光ホテルにおける様式についての論考（砂本, 2008）があり、大正から昭和において、建築、生活文化、デザインにおいて、ホテルに和風要素があったことが明らかになっている。

本来、「洋式」を志向したホテルに、なぜ「和風」が必要だったのか。ホテルは和風をどのように受容し、現代ホテルにおける和風要素につながったのか。そして、今日、旅館の洋風化は論点になっても、ホテルの和風化は問題にならないのか、この背景には、ホテルにとっての和風は、旅館の洋風化と根源的な違いがあるのではないか。

本研究ではホテル史の基礎研究として、日本のホテル変遷のなかで、ホテルにおける「和風」がいかに変化したのか、明治から昭和前期の近代ホテルを主な対象に、その変遷と役割について明らかにすることを目的とする。研究方法は先行研究から近代ホテルの概要を把握し、社史等による文献調査と現況確認、現地調査から対象ホテルに関する知見をえて、分析・考察を行う。

## 2. ホテルの変遷について

### 2-1 ホテルの誕生

旅の発達過程とともに、ホテルが発達した欧米の歴史と異なり、日本におけるホテルは「欧米との交流」の中で成立した。幕末期に外国人の受け入れ施設としてホテルが誕生した背景には、時勢に伴う諸外国との交渉などが増加し、外国人を受け入れるための施設が必要だったことに加え、既存の宿泊施設である旅籠を始めとした日本の既存施設への不満があった。特に旅籠の経営的脆弱性に加え、家屋の問題（個室空間の乏しさ、欧米人との身長差、冬季の暖房）、衛生環境、食事などが課題だったと指摘されている（木村，2006）。

日本で最初のホテルは、居留地の横浜にオランダ人元船長フナーゲルが開業した横浜ホテル（フナーゲルホテル）であるといわれる。1860年（万延元）にはすでに開業していたとされ、1862年に開業した「ロイヤル・ブリティッシュ・ホテル」の経営者もこのホテルから独立した人物であった。横浜ホテルは、木造で広い食堂、ビリヤード室、8室の個室、バーを持ち、個室にはベッドが置かれていた<sup>(3)</sup>（澤，1996a）。開国が進むにつれ、居留地において外国人が運営した外国資本も増加し、明治政府が推進した日本資本のホテルとともに発展していった（木村，2006）。特に横浜は、大政奉還がなされた1867年（慶応3）では8軒、1880年には外国人を中心に15軒のホテルが経営されており（澤，1996b）、初期ホテルは居留地の外資系ホテルを中心に発達した<sup>(4)</sup>。

1868年（慶応4）に、江戸に開業した（築地）ホテル館が、欧米様式を取り入れた日系の本格的なホテルであった。このホテルは江戸幕府が諸外国の要請により建設を決定し、外国人の設計により建設された（村岡，1981）。全体的には洋風の意匠でまとめられつつも技術的問題により<sup>(5)</sup>、部分的に伝統的な和風要素を多くもつとともに、「和風の意匠には、外壁の海鼠壁や塔の花頭窓・鐘・風鐸<sup>(6)</sup>」を用

いた、いわば本格和洋折衷様式であった（初田，1983）。その後、首都にグランドホテルとして1887年（明治20）に創業した帝国ホテルは、列強と締結した不平等条約改正に向けて欧化政策を推進した井上馨が開業を提唱し、渋沢栄一、大倉喜八郎を中心とする財界と国が協力して誕生させたホテルであり、欧米諸国に対して、西洋化した日本を象徴する役割をも担っていた<sup>(7)</sup>。さらに金谷カッテージイン（1873）、富士屋ホテル（1878）、軽井沢万平ホテル（1889）などの避暑地、温泉地にも相次いで外国人向けのホテルが開業した<sup>(8)</sup>（村岡，1989）。

政治・経済の中心であった東京・大阪、開港<sup>(9)</sup>された横浜、長崎、保養地であった箱根、軽井沢などにホテルが建設されていったように、この時代のホテルは、欧米人向けの迎賓館や休暇を過ごす場としての宿泊施設という役割を期待されていた。一方で、住居として定められ港を利用する人々が利用した居留地のホテル、政治・経済の含めた都市部、避暑を中心とした休暇を過ごすリゾート地ではおのずから、その滞在目的は異なっていたといえよう<sup>(10)</sup>（斎藤，1994）。特にリゾート地において、洋食の食材の調達は困難であり、のちに外国人専用となる箱根の富士屋ホテルも、当初は横浜から洋食の食材を運ばせていた。ホテルは外国人の増加および国際的な催事の施設として重要視されていたが、季節変動、国際情勢の変化に伴う影響を受けやすいこともあり、建設、運営には大きな課題を抱えていた。そのため、ホテル関係者は国による支援をたびたび求めるなど、経営的には厳しい状況を抱えていた（勝木・篠野，2001）。

### 2-2 ホテルの定義

一方で、近代初期においては、ホテルとは何か、という定義自体が曖昧であった。砂本（1998）によるとホテルという用語は、法的裏付けのないおおよその洋式の設備を備えたものと捉えられており、また、宿泊業者自身が「ホテル」と

名称した施設をホテルとして捉えていた。しかし、実際にはホテルという洋風のイメージにあやかた実態を伴わない「旅館」が相次いで開業し、業界に、そして外客に相当の混乱をきたしていたという。さらに「宿屋営業取締規則」（1887）などの法規上において、日本式の旅館と区別されておらず、独立した概念を持つ施設として認められていなかったうえ、料理店との兼業を禁止されていた。こうしたなか、日露戦争後に訪日外国人が増加し、国際観光の重要性が高まったことを背景に設立された日本ホテル協会は、1909年（明治42）に「日本ホテル組合」の設立を申請するが、旅館業一般との区別ができないと却下された（勝木・篠野，1999）。1930年（昭和5）には国際観光局設置を機に、当局は警視庁を通じて、「ホテル及飲食店兼業二関スル件」を通牒して、建築構造、客室の最小面積、食堂の形式などが一定以上の施設を「洋式旅館」と認め、料理店を兼業することを許可した。ここに初めてホテルが法規制上に認められた（勝木・篠野，1999）。この背景には、国際観光局成立により、外国人受け入れを目的として政府の低利融資を受けたホテルの開業が相次いだことがある。融資に伴い問題となったのが「ホテル」「旅館」の区別であり、砂本はこの相違が明確でなければ政府が「ホテル」建設事業へ援助をする際に、施設別の重点整備を行うことができないために、その区別を付ける必要があったと指摘している（砂本，1998）。

しかし、同年に日本ホテル協会は、重ねて旅館は和式、ホテルは洋式と区別するように、「宿屋営業取締規則改正希望事項」（1930年）として要望していることから、先の通牒は不十分であったと考えられる。こうしたなか、ホテルの独自性の確立は民間のホテル関係者のなかで試みられていった。彼らが目指したホテルは、単なる宿泊施設ではなく、食事や娯楽など様々な要望に応えられる複合的な施設であり、その整備に力を注いでいった（勝木・篠野，1999）。ホテルが明確に旅館と



図1 初代本館

出典 帝国ホテル提供



図2 本館ロビー

出典 (株)帝国ホテル (2010b)

区別され、「洋式の様式」として定義されるのは、1948年（昭和23）に施行された旅館業法であった。

### 3. 近代におけるホテルの「和風」について— 帝国ホテルと富士屋ホテルを中心に—

日本のホテルは、模倣することからはじまり、旅館とホテルの区別も含め、和風との距離を取ることが必要とされていたにもかかわらず、和風と思われるデザイン、建築が散見される。ホテルはいかに和風と向き合ったのか、首都ホテルの代表的な存在であった帝国ホテル、伝統的な温泉宿が集積していた温泉地でリゾートホテルとして発展した富士屋ホテル<sup>(41)</sup>（斎藤，1994）の動向を中心に、その意味と役割を考察する。

#### 3-1 帝国ホテルと富士屋ホテルについて

明治維新後の急激な西洋化の流れのなかで、建築にも変化が生じることになる。特にそれは官庁や学校などに顕著であり、当初はホテルも含め、「擬洋風<sup>(42)</sup>」と呼ばれる、日本の技術で見た目を西洋風にしたものが出現した。こうした技術的な課題は、次第に西洋建築の様式に則った技術者が増加することで解消していった。

ホテルのハードウェアは、一般的に改修や建て替えに伴い大きく変わる。新たなコンセプトに基づいた外観、内装デザインが採用されるためである。帝国ホテルの場合、建築で見ると開業時から5つの節目があった。まず政財界の後押しを受けて開業した帝国ホテルは、本格的な

西洋化を志向した1890年開業の初代本館、次に米国人建築家F・L・ライトが設計した1923年開業の2代目本館（以下ライト館）、第二次世界大戦後1952年の接収解除後、アメリカ人を主としたインバウンドの急増に応えるために1954年、1958年に相次いで開業した第1新館ならびに第2新館、そして大量旅客輸送時代に向け、ライト館の後継として1970年に開業した現本館、そして1983年、両新館跡に建設されたインペリアルタワー（現帝国ホテルタワー）である<sup>(43)</sup>。

一方で近代温泉リゾートホテルの先駆けであった富士屋ホテルは、横浜・神風楼の養子であった山口仙之助が、富士山・温泉という観光資源、横浜・東京から近距離で外国人の来訪が期待できた箱根宮ノ下温泉にあった藤屋旅館を買い取り、1878年に創業した。1883年に大火で建物を失った後、1884年に平屋建て洋館、1885年日本館、1886年2階建洋館、1887年日本館、東海道線の開通、馬車鉄道の開通、湯本から宮ノ下間の道路開設などにより交通の利便性が飛躍的に良くなった1891年に本館新築（現本館）が建設された。日露戦争勝利後の好況期になると1906年新館（現西洋館）、1936年には三代目山口正造が設計した鉄筋コンクリート造、5階建の建物でありながら、和風を基調とした意匠をもつ新館（現花御殿）が建設された。第二次世界大戦後は訪日外国人の増加に対応するため鉄筋コンクリート式1960年フォレストウイング、2020年の大改修ではカスケード・ウイングが新設されている<sup>(44)</sup>。

いずれも、社会状況、災害などにより、建て替えを行い、ホテルを発展させてきたが、帝国ホテルが公的、社会的な影響を受けて変化し、時代にに応じて建て替えを行ってきたことに対して、富士屋ホテルは経営者、地域的影響を受けながら、地域シンボルともなった建物を保存・活用しながら発展してきたといえよう。

#### 3-2 明治期から大正期におけるホテルの和風

1890年に開業した帝国ホテル初代本館では、鹿鳴館の和洋折衷の外観を嫌った井上の意向で、西洋的な意匠が徹底された。バックマン、コンドル双方の下で学んだ建築家の渡辺譲が設計したのは、ネオ・ルネッサンス様式の西洋建築であった（図1）。したがって施設も客室60室、食堂の他、舞踏室（ボールルーム）、撞球室（ビリヤード）など賓客の娯楽施設を含め、概ね西洋式の設備、内装であった。しかし、ロビーの一角に和風の意匠があったことが、写真に残されており（図2）、「ネオ・ルネッサンス様式の外観と和洋折衷の内装」であった（株）帝国ホテル，2010a）。

鹿鳴館に代わる迎賓館として誕生した帝国ホテルだが、賓客ビジネスだけでは経営が成り立たず、当初想定していなかった日本人客の食堂や宴会需要を取り込むことで生き延びた。1909年に初の日本人支配人に就任した林愛作は、大宴会にも対応できる厨房設備を整えた。1913年の結婚披露宴の写真（図3）を見ると、半円窓が特徴的なボールルームに男性ば



図3 1920年、初代本館のボールルームで開かれた披露宴  
出典 帝国ホテル提供

かりの出席者が和装で集い、会場やテーブルには松竹梅をあしらっている。渋沢の帝国ホテル利用状況を見ると、結婚・披露宴が、1900年頃から頻繁に開かれていたことが分かる（（公財）渋沢栄一記念財団，2014）。

富士屋ホテルは、旅館を買収し改装して、外国人向けのリゾートホテルとして開業したが、初期は極めて貧弱な洋式であった（富士屋ホテル，1938）（図4）。その後も、1891年までは、たびたび日本館を増築しており、技術的な問題も含め、様式の設備を完備することに苦心した様子が見える。1912年の時点では洋館67室（ツイン39、シングル28）、日本館27室（シングル）の合計収容人数は120名規模になっていた。顧客に関しては、宮ノ下温泉で外国人客を受け入れていた奈良屋旅館と1883年に協定を結び、奈良屋旅館は日本人、富士屋ホテルは外国人専用とすることで対立を解消した。この協定



図4 1878年頃の富士屋ホテル  
出典 放送大学附属図書館提供

は1923年まで有効であった（富士屋ホテル，1958）。

両者ともに訪日外国人旅行者の確保に苦心する様子が見えるが、初代山口仙之助は「富士屋ホテルは外国人の金を取るを以て目的とす、日本人の金を取るは恰かも子が親の金を貰ふに等し、自分は純粹なる外国の金貨を輸入するにあり、日本の客には来てもらはずともよい」（富士屋ホテル，1958）と述べ、外国人専用とするのは外貨獲得のためと明確に位置付けている。後年、日本人を宿泊させるようになっても、食事代は外国人料金と日本人料金を設けていた。

その一方で、山口は日露戦争後の1906年に日本ホテル協会の発会に向けて、帝国ホテルなど23軒のホテルに手紙を送付しているが、そのなかでホテルが日常的にほかの業種に比べ外国人に接する機会が多いことを指摘したうえで、「邦家の風光文物を直接外国に紹介する緊要なる機

関となり」（運輸省，1946）と述べており、日本の美しい景観や文化の産物を紹介する施設であるという意識が存在していた。この山口の思想は、その後の富士屋ホテルの建築、サービスなどでも反映されている。例えば、食事のメニューでも日本の文化や景観を伝えるデザインを用いたり、後年は日本文化の紹介文まで掲載した<sup>(15)</sup>。ホテルにおいて、レストランのメニュー表は滞在者が必ず手にするものであり、富士屋ホテルに限らず、日本文化の広告媒体となっていた。

図5は1903年の帝国ホテルダイニングルームのメニューである。和服の女性（左）と窓越しに富士を見渡す風景（右）は、まさに風光文物を映し出している。興味深いのは、政府が積極的に関与したくない日本文化もまた、このツールを通じて、広まっていたことだろう。その代表例が「イレズミ」である。山本（2021）によると、この時代は、日本においてイレズミに対する法的規制が強化され、警察により取り締まられた時代でもあったが、同時期は欧米を中心にイレズミが流行した時期でもあった<sup>(16)</sup>。日本国内の施術では、外国人客にとっては「受け皿」、彫師にとっては「抜け道」としてホテルが利用されていた。図6は山本（2021）が入手した資料だが、表はメニュー、裏側は彫師の案内となっている。これらの体験は、日本ならではの観光体験メニューであったと指摘され、帝国ホテルでもホテルのボーイなどが彫師と客を仲介

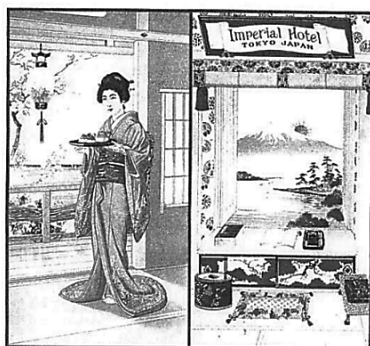


図5 ダイニングで提供されたメニュー表  
出典 帝国ホテル（2010b）

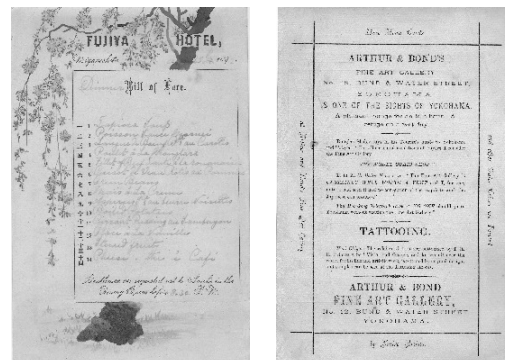


図6 1882年のメニュー、左側が当日のメニュー、右側が裏側の広告欄でイレズミについて宣伝  
出典 山本芳美氏提供

していた。滞在客がジャポニズムブームのなか、日本的な絵柄をはじめ、日本の伝統文化を土産として持ち帰った事例と言える。横浜のホテルでは、ホテル自身が客の要望に応じて、彫師を紹介していた（山本，2021）。

1923年に開業した帝国ホテルは、初代本館の老朽化に伴い、2代目本館、通称ライト館を建設した。ライト独自の意匠は、西洋建築とも日本建築とも異なる外観をもたらした。ライトは、1893年に開催されたシカゴ万博で平等院鳳凰堂を模した日本館（鳳凰館）を訪れ、影響を受けたと言われている。ライト自身が「古き日本に敬意を表している」（明石，2004）建築と語り、林支配人への手紙では明白に、日本の文化に脱帽し、その文化に忠実に新しいものを作り出し生かしたのが帝国ホテルである（㈱帝国ホテル，1990a）と書き記しているとおおり、日本独自の文化や建築に対する敬意と日本の西洋建築群を「まずいまいもの」「醜悪な舍利」（明石，2004）と断じた痛烈な批判が、ライト館に投影されたと考えられる。またライトは内装、家具、絨毯、照明器具からグラスやティーカップ、皿などの食器に到るまで自らデザインした（㈱帝国ホテル，1990b）。帝国ホテルのメンバーで現在も使用されているライトがデザインしたグラスには、内装と同様、日本の伝統的な意匠である市松模様が配されている。一方、中庭の池には、太鼓橋がかけられ、鯉や亀が飼われていた（竹谷，1987）。ライトは「日本は庭園の国」と述べており、「庭を建築の本質的な要素として有機的に取り込んだ」と述べ、テラス、バルコニー、回廊もまた庭として位置づけた（㈱帝国ホテル，2010a）。こうした回廊には松の鉢も置かれ、日本的な要素を印象付けている（図7）。

ライト館竣工に先立つ1922年、初代本館の焼失とライト館の工期の遅れの責任をとって辞任した林支配人の後、富士屋ホテル社長のまま帝国ホテル常務取締役支配人を務めていた山口正造に代わり支配人となったのが、犬丸徹三であった（㈱



図7 ライト館内 中央上部に松の鉢植  
出典 田梨由太郎（1923）

帝国ホテル，1990a）。支配人就任後犬丸は、関東大震災により日比谷大神宮が倒壊したため、利用客の要望を受けて、ホテルで従来行われていた結婚披露宴に加え、館内に仮設の神式場を設置して、永島式を採用した結婚式を提案した。永島式は1891年に登場した神主をはじめとするスタッフや装備一式を出張スタイルで行う結婚式であり、家庭での挙式需要を取り込み、広く受け入れられていた（㈱帝国ホテル，1990a）。永島式の採用により、帝国ホテルは館内で挙式と披露宴を行う新たなビジネスモデルを創始した（図8）。こうして結婚式という日本人の文化を象徴する祝典の場を取り込んだことは、西洋化を志向してきた同ホテルが、和を受け入れ変容していくきっかけとなった。

ホテル内で結婚式と披露宴を行うビジネスモデルは、結婚式においては施設、設備、サービスともに、和の要素だけで構成されていたが、披露宴では一転してフランス料理が西洋式のサービスで供された。また結婚式、披露宴を通じたサービスとしては、新婦に付き添い、身の回りの世話をを行う「介添え」職がある。和のサービスと洋のサービスが祝典の中で共存する独自のスタイルは商品として定着し、現在に到っている。

### 3-3 昭和前期におけるホテルの和風

富士屋ホテルは、1930年に3代目社長となる山口正造の影響を強く受けた本館の食堂（現在のメインダイニング）を竣工した。折り上げ格天井で、格間に多く



図8 ライト館内での結婚式の様子  
出典 帝国ホテル提供

の植物画を描き、壁面の細部にも日本的意匠をもつ社寺建築のような和洋折衷式であった（富士屋ホテル，1958、砂本，2008）。山口は、1936年に相次いで開業した花御殿、富士ビューホテルの設計にも関わっている。前者は、唐破風のファサードをもち、1階が校倉造を模した意匠、屋根が千鳥破風をもつ入母屋造り、高欄付のバルコニーなど、豪華な和風を意識した意匠が特徴的な建物であった（図9）（箱根町教育委員会，2013）（砂本，2008）。この地下には物産陳列場がおかれ、花札、麻雀牌をデザインした照明もあった（山口，2015）。このころからカード型のメニューの裏には日本の文化、風俗、習慣、芸術などについての短い文章が掲載されるようになる（図10）。文章は青山学院の酒井温理が執筆しており、後年、『We Japanese』としてまとめられ、出版された。

同時期の富士ビューホテルも「日本趣味意匠の建築」（図11）と指摘されており、「海外生活が長く、洋行帰りの正造の「眼」を通して、設計され、いわば、外国人理解に基づく「ジャポニズム」にちかいいものとして考えるべき」と指摘されている（砂本，2008）。この1930年には国際観光局が設置され、30年代だけで14軒のホテルが開業したが、そのなかには、和風意匠の琵琶湖ホテル、蒲郡ホテルなども誕生した。

この時代には民族の独自性を追求する動きが生じはじめ、建築にもさまざまな影響が及ぶことになる。その一例が、いわゆる「帝冠様式<sup>(17)</sup>」と呼ばれる、西洋



図9 花御殿  
出典 筆者撮影

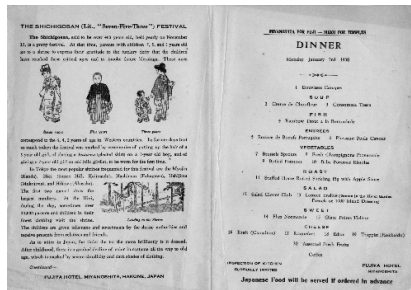


図10 日本文化の紹介  
出典 富士屋ホテル提供



図11 創業当時の富士ビューホテル  
出典 富士屋ホテル提供

風の建築の上部に、和風の屋根をかけたものである。国粹主義・ナショナリズムを表現しようとした一種の日本の表現であるとされ、競技設計（コンペ）において半ば強制的に求められた（橋寺・川道，1991）。戦争にむかいつつあった時代背景を踏まえると、宿泊施設の中でも地域の核となるような象徴性の高い施設では、和風が大いに取り入れられる傾向が生じるようになったことがうかがえる。

一方で砂本（1998）は、国際観光ホテルの整備にあたっては、建築設備、客室構成等の規準を示すものはあったが、建築意匠に関する具体的な規準はなかったと指摘している。なぜなら「国際観光ホテル」の建築意匠は日本趣味をまとめたものから、民家風、コテージ風、スパニッシュ、近代様式まであり、事実、多種多様で、国際観光局の意志が介入したとは考えがたいためである」と指摘している。むしろ、ホテルの関係者が、リゾートライフ（テーマ性）のイメージを最も喚起するのがホテルの建築意匠と考え、

外客にとって良かれと考えられる嗜好にあわせて個々のテーマ性に沿った建築意匠を生み出そうとしたこと、また、ホテルひいては観光地同士の差異化を果たす手段として建築意匠を利用しようとしたことがあると指摘している（砂本，1998）。

### 3-4 ホテルにおける和室について

この時代のホテルは、客室においても洋室以外に和室などがあった。ホテルの和室について勝木・篠野（2001）の研究によりその詳細が論じられているため、ここでは、その論考からホテルの和室について整理する。1920年代から30年代は、シティホテルも相次いで建設されているが、1932年にホテル経営者の一人であった佐藤満平は、ホテルの設備などをもっと和風にして、一般の日本人も利用しやすくするように説いている。実際に1939年には本来外国人を対象とした帝国ホテルの利用客の6割、第一ホテルの利用客の9割が日本人であったという。ホテルにおける茶室の導入は、1909年の築地精

養軒ホテルだといわれ、それ以後、建設された19軒のホテルのうち、11軒に和室がみえる。当初は家族連れが想定されたが、実際には洋装の中年紳士が利用していたという。帝国ホテル支配人でもあった林愛作は、洋室のベッドに対して、和室は収容人数に融通が利くことを評価しており、和室の利用は利用、経営の両側面から効果的なものと捉えられていたと指摘されている。さらに浴室においても、各部屋に浴室を備えるものを洋式風呂、共同の浴場を日本式と捉えており、日本人の生活文化もホテルの設計に反映していた<sup>(18)</sup>（勝木・篠野，2001）。

これらの研究を基に、改めて各種資料を調査すると、新大阪ホテル、名古屋ホテルなどにみえる和室は、特別室に「日本間」をつけるなど（図12）、付加価値としての位置づけになっている。さらに、茶室は1927年のホテルニューグランドに既に見えるほか（図13）、都ホテルなどにも存在した。

ツーリストビューローが1932年に発行



図12 新大阪ホテル 特別室  
出典 ㈱ロイヤルホテル（2005）



図13 ニューグランドホテルの茶室  
出典 ㈱清水組（1936）

した『旅程と費用概算』を調査すると、旅館とは別項目で、14軒のホテルが掲載されているが、和室をもつ「和洋両式」など5つのホテルが和室を持っている<sup>(19)</sup>。また、和室がない施設においても、和食を提供しているホテルがみられるなど、結婚式の儀式や宴会以外にも、宿泊、料飲なども含め、ホテルが日本人利用者向けに和風を取り入れていたことがわかる。

以上のように、近代日本のホテルの「和風」とは、①洋式を志向しながらも技術的な問題で和風を取り入れざるを得なかった、②外国人向けに差別化・個性化するためのデザインとして取り入れられたことに加え、③日本人の生活文化におけるホテルの利用法として和の要素が取り入れられていった3つの流れがあったといえよう。

#### 4. 和風の記号化

##### 4-1 和風という「記号」

建物における内外装の時代変化は、明治から戦前にかけての政治、経済、文化、習俗といった要素の変化とも密接に関わっており、その時代背景を象徴する「記号」という側面も持っていた。その意味では、ホテルという海外への窓口において、「洋風化を取り込む和風」という側面が生じてくることは当然の帰結であるともいえよう。

これは帝国ホテルの第二次世界大戦後の変化にも表れており、接収解除後の1954年には、急増するインバウンドを受け入れるため、ライト館の東隣に第一新館が開業した。多くがアメリカ人であったことに合わせ、外観はシンプルなアメリカ式のビルであったが、あやめの透かし彫りを施した欄間、和紙の壁紙、カーテンや椅子の張地に絹織物を用いるなど（竹谷、1987）、アメリカ人向けに和を意識した内装であった。次いで1958年には、第2新館が竣工し、宗達の唐獅子を龍村美術織物に織らせたつづれ織りがロビーの一角を飾り、ロビー奥の階段吹き抜けには燈籠風の照明器具を配した。またロビーのカフェテラスには、灯籠、置き石、

樹木を配した日本庭園を造成、各所に小規模な庭園を配するなど随所に和風を取り入れた（榎帝国ホテル、1990a）。

当時の帝国ホテル社長で、1930年代の国際観光ホテルにも深くかかわった犬丸は1964年に、日本のホテルが海外からどのようにみられているのかについて、AP通信東京支局夫人だったブラインズの言葉を「示唆に富む言葉」として紹介している（犬丸、1964）。そのなかでは、ブラインズ氏は「ホテル業や観光事業に携わる人々は、日本の風俗習慣と外国のそれらとをマッチさせた、すべての計画をたてられたい」と述べたうえで、寝具、風呂、朝食などの改善を指摘している。さらに、日本におけるホテルについて下記のように述べている。

「観光客は日本を見物に来るのであって、米国やそのほかの自分の国の写し絵を見にはるばるやって来るのではない。もちろん、ある程度の自国式のコンフォートは許されねばならぬが、よい日本旅館の雰囲気も忘れてはならない。冷たい飲み物を飲みながら、涼しそうな日本庭園を眺めるといったチャームは、保存せねばならず、【中略】日本はあらゆる点で日本式を再現せねばならぬ。かくして外国人旅行者は、日本の生活にすこしでもひたりたいと、かさねてやって来るものである」（1948年（昭和22）8月15日『日本観光新聞』）

外国人が求める日本での滞在とは何か、日本のホテルにおける「旅館的要素」の魅力がすでに指摘されていることは興味深いといえる。

##### 4-2 外国人むけ「デザインとしての和風」と定着する「生活文化の和風」

第二次世界大戦後、接収明けの富士屋ホテルは、宮ノ下御用邸の払い下げを受け「菊華荘」として、日本の建築や庭園、茶の湯などの文化を外国人に紹介する場として利用した（富士屋ホテル、1958）。

1960年にはコンクリート式のフォレストウイングを竣工したが、装飾の少ない外観や、同型の客室が整然と並ぶ構成は、それまでの富士屋ホテル建築とは異なり、大小の宴会場などを備えた近代的ホテルの形式であった。従来の花御殿においても、ダンスホールをチャペルに改装し、現在ではリゾートウェディングに活用するなど、日本人が中心となった時代におけるホテル利用を進めてきた。2018年には、耐震補強及び改修工事をおこなったが、建物は文化的価値を優先した復原を行い、クラシックホテルとして経営が続いている。戦後の大衆化の中で、近代的なホテルとしての様相を整えたが、今後のホテル経営においては、和洋折衷の建物自体が、ホテルを表す象徴的なシンボル<sup>(20)</sup>として活用されているといえよう。

帝国ホテルはライト館が老朽化のため1968年に取り壊された後、大阪万博の開催に合わせて1970年に現本館を開業した。地上17階、竣工当時、都内で2番目の高層建築であり、客室数777室、各種レストラン、バーラウンジ、大中小宴会場を持つ大型ホテルになった（帝国ホテル、2010a）。ここでは既に外国人を中心とした施設づくりではなく、ホテルの大衆化が進む中で、日本人にとっての非日常の場として役割が求められていったといえよう。一方、装飾においては国産品を重視し、日本人作家の作品が多用された。しかしそれらはいずれも、現代的なものを素直に受け入れられるよう表現すると同時にそれぞれの個性を打ち出すという基本コンセプトを具体化したものであった<sup>(21)</sup>（帝国ホテル、2010a）。現本館の内装においては、第一新館、第二新館のようなインバウンドを意識した和の要素は薄まり、ホテルコンセプトに沿って日本人作家による現代的な作品を積極的に採用していったといえるだろう。

この本館のハードウェアにおける和の要素としては、村野藤吾設計による3つの茶室から成る数寄屋造りの「東光庵」があり、この時代のホテルの役割を表している。「東光庵」は表千家の茶室である

「残月亭」を写した十畳の茶室「月歩」、裏千家の茶室「又隠」に倣った四畳半の「東光」と武者小路千家の茶室の特徴を備えた「松濤」が設けられている。付属する日本的な屋上庭園は、宴会場「桜の間」と共有しており、茶道の流派ごとにあわせた茶室を整備したといえよう（帝国ホテル, 2010a）。

茶室は建築と庭園などのハード面に加え、茶器などの道具、料理、接客というソフト面も含め日本文化の集合体である。第一次、第二次ホテルブームに建設されたフルサービス型のホテルには、茶室が設けられることが多く、1980年代半ばには、ホテルの茶室特集や専門書籍が発売された。1983年に発行された茶道専門誌には21軒のホテルの茶室が掲載されている。ここに掲載されている茶室は従来の庭園だけではなく、建物が大型化するなかで、建物内に茶室と庭園を取りこむ形で建設されていた<sup>(22)</sup>（株交社, 1983）。茶道専門誌はホテルの茶室の良さについて、立地の良さ、駐車場やラウンジ等が完備されており、移動・行動しやすいこと、道具のレンタル、ホテル従業員によるサポートなどの利便性が優れていることを指摘している（淡交社, 1983）。

いわば立地、各種サービス、料飲、接客なども含め、ホテルの総合力が活用できたこともホテル内の茶室の魅力であった。これは外国人向けのデザインとは異なり、日本人の生活のハレの場としての利用が定着し、和の空間が必要とされるようになった一例であった。また茶室は外国人宿泊者にとっても、日本文化を体験できる場として利用されてきており、ホテルの和の要素として定着していった。

ホテルは建替え、リノベーションなどにおいて、設備を整えるだけではなく、時代に応じた和風を取り入れ、定着させていったといえよう。近年では外資系、日系の帝国、オークラ、ニューオータニなどの御三家だけではなく、宿泊主体型ホテルクラスにおいても、装飾や客室などで和風への回帰を強めている。帝国ホテルが新たな建て替え計画において、ど

のような舵を取るのかが注目されるだろう<sup>(23)</sup>。

以上のように、旅館が江戸時代の各種の宿や料亭などの機能をもちながら、和式という枠組みで日本独自のビジネスモデルとして確立したように（前田, 2002）（大久保, 2013）、ホテルもまた洋式の機能と和風の魅力を生かした和洋折衷の一つのビジネスモデルにしてきたといえよう。

しかし、観光の文脈において、文化を単にデザインとして捉え、安易に商品化することについては、常に批判が存在する<sup>(24)</sup>。日本文化を装飾したデザインだけを優先するのではなく、そこに文化の真正性を担保する責任もまた必要であるといえよう。

## 5. 結論

### 5-1 ホテルにおける和風の変遷

日本における宿に対して、訪日外国人のために誕生したホテルは、旅館と差別化する必要があり、それはまさに「洋式」であることであった。このため、ホテルは常に洋式の確立と旅館との差別化を追求してきた。初期の外資系ホテルにおいては、外国人が経営しており、本国の代替施設だったが、日系施設は接客も含めて洋式を進めていく必要があったといえよう。

一方で、リゾート地も含め、外国人の活動・滞在時間が多様化するなかで、和風がホテルにとって差別化になっていった。その結果として、ハード部分では洋式化を模索しながら、装飾、メニュー表などのソフトにおいて和風を用いていた。そのなかで宿泊施設自身も「邦家の風光文物を直接外国に紹介する緊要なる機関となり」という意識が存在していた。そして、それはホテルという「滞在の場」において、文化交流の場という役割を担っていたことがあげられるだろう。

しかし、季節変動が大きく、常時外国人客だけでは経営が成り立たないこともあり、日本人顧客のホテル利用もまた、重要になっていった。いわば「日本を見物に来る」外国人から、日本人を対象に

するなかで、生活文化としての和風が導入された。ホテルが大衆化し、大型化するなかで、結婚式、宴会、茶会など、日本人の「ハレの場」に和風もしくは和洋折衷が成立し拡大していった。このように、日本のホテルは、洋風であることを求める一方で、日本的な社会のなかで独自の変容を遂げたといえよう。

### 5-2 ホテルにおける和風について

以上から近代日本のホテルの「和風要素」とは下記があったといえる。

- ①幕末から洋式を目指しながらも技術的問題で和風を取り入れざるを得なかった。
- ②明治期から外国人向けに差別化・個性化するためのデザインとして取り入れられていた。
- ③大正時代以降、利用対象者に日本人が増加するにつれ、日本の生活文化や儀式などが意識され、ホテルの構造に影響を与え、サービスを創り出していった。
- ④ホテルの和風化は訪日外国人の増減や政策のなかで重要性がますます、国際情勢、社会状況の影響を受けやすく、時代の様相を反映する形で建築、装飾、サービスが形成されてきた。

2000年代以降、洋式を取り入れることによって、近代に生まれたビジネスモデルが揺らぎ始めた旅館に対して、ホテルにとって和風を取り入れることは、彼らのビジネスモデルそのものだといえるだろう。特に世界水準の施設、規模を持つことが可能になった現在、日本のホテルは他地域、施設と差別化するうえで、日本をいかに表象していくのか、が一つのテーマになっている。見解を変えれば、日本の近代ホテルは、まさにこうしたホテルの萌芽的存在であった。

しかし、旅館の本質が和式の生活から生まれた生活文化の延長として成り立ち、そのなかに和風が抱合されているのに対して、ホテルにおける「和風」は常にある種のデザイン、メッセージとして利用、活用されてきた。そこに、本質的な日本の文化が表象されているのかについて、十分な議論はなされてこなかった。



一方で、近年、宿泊施設の持続可能な運営と社会・環境に対する取り組みが求められるなか、地域文化への理解や知的財産権の保護についても言及されるようになった<sup>(25)</sup>。ホテルが世界中から人々が集まる交流の場であり、地域の魅力を伝えられる場であるならば、和風デザインに特化するのではなく、その場をいかに生かし、地域文化、そして日本文化に貢献できるのか、自ら問い、取り組む必要があるだろう。

21世紀になり、環境、文化ともに持続可能な社会が求められている。ホテルの多様化が進むなか、ホテルが文化を消費する場から、地域固有の文化をはぐくみ、次世代に継承できる場になれるのか、まさに正念場に来ているといえよう。

## 謝辞

本論文は、(株)帝国ホテル、(株)富士屋ホテル、(公財)日本交通公社 旅の図書館、山本芳美氏に資料提供、文献の閲覧等でご協力いただきました。ここに記して感謝いたします。

## 補注

- <sup>(1)</sup>三井ガーデンズ日本橋：大浴場「Japanese Bath」、江戸小紋の着物などにみられる水の描写をレリーフ歴史、文化、商業の中心である日本橋の街並みをモチーフに組み合わせたパネル(HP)など。各地域で地域文化とコラボレーションしている。また、パークホテル東京は、「日本の美意識が体感できる時空間」というコンセプトに、芸術家が直接客室に「日本の美」をテーマに描いたアーティストルーム(客室)を設けている。
- <sup>(2)</sup>日系：ホテルニューオータニ「新・江戸ルーム」ヒノキの浴槽、江戸の文様、日本酒など五感で「江戸」を感じる」、オークラ「ロビーに四弁花文様の壁面装飾、麻の葉文様の組子、「三十六人家集」の料紙をモチーフにした壁画」に

加え、茶室、和食など。

外資系：アマン東京「日本の伝統的住居には欠かせない生け花と縁側が外と室内の間を取り持ち、日本家屋の内装デザインを施した客室」アンダーズ東京「雪室」で食材を熟成する日本古来の技術」など。

- <sup>(3)</sup>初期の横浜のホテルの多くは木造建築で、米公使書記官ヒューストンが横浜ホテルを「半ば日本風、半ば西洋風」と述べたように、西洋建築とは言い難かった(澤護, 1996a)
- <sup>(4)</sup>1881年度版『マレー・ハンドブック』には27軒の宿泊施設が掲載されているが、ホテルと名称がつくのは、11軒(横浜8軒、箱根1軒、大阪1軒、兵庫2軒)である。
- <sup>(5)</sup>工藤(1994)によると幕末に諸藩によって開かれた諸工業、製鉄所や造船所などの諸施設をさきがけに、明治維新後は多くのお雇い外国人により洋風建築が普及していった。しかし、煉瓦などの材料不足に加え、民間の棟梁・職人あるいは官公庁の下級技術者たちは、依然として日本的伝統の小屋組みを応用し、内外の意匠はコロニアル・スタイルといったいわゆる擬洋風建築を生み出した。本格的な洋風建築は工部大学の創設などの教育体制の整備などと共に進んでいった。しかし、1891年の濃尾地震はれんが造の建造物に大きい被害を与え、外国建築をそのまま導入することの危険性を教えた。サンフランシスコ大地震(1906)で学んだ佐野利器などを中心耐震耐火構造の鉄筋コンクリートや鉄骨造が積極的に取り入れられるようになり、日本における洋風建築を作り出していったといわれる。工藤圭章(1994)「建築」『日本大百科全書』平凡社(ジャパンナレッジ版)。
- <sup>(6)</sup>初田(1983)では、外壁の海鼠壁はベリジェンス(イギリス人設計家)が許可したのに対し、これらの「伝統的な和風の意匠」を用いることを推しすすめたのは清水喜助であったと指摘す

る。その理由として江戸時代以前の建築の社会的地位の象徴でもあるこれらの要素は外国人に対してではなく、日本人に対して建物の評価を高めるといふことに目的が置かれていたのではないかと指摘している。

- <sup>(7)</sup>井上馨の伝記である『世外井上公伝』には、「帝国ホテルは鹿鳴館と密接な関係を有し、国際的に重要な役割を有って創立されたものであることは欧化政策上見逃すことが出来ぬ」と示されている。井上馨侯伝記編纂会(1933)『世外公伝』第3巻、78ページ。
- <sup>(8)</sup>いずれも、住居や周辺家屋、旅館を改修して開業している(村岡, 1985)。
- <sup>(9)</sup>「安政の五カ国条約」(1858年)により、翌年箱館、神奈川(横浜)、長崎が開港され、新潟、東京(築地)、大坂、兵庫(神戸)も順次開港した。
- <sup>(10)</sup>安政の通商条約によって開港場が指定され外国人はその居留地に居住することが定められ、外国人の行動は公使および領事を除き、その居留地から十里四方以内の遊歩のみに限定された。日本在住の外国人にとって、熱帯に匹敵する高温多湿の夏は耐え難いものであったといわれ、外国人の国内旅行は1874年によりやく条件付きで許可され、1879年には御雇い外国人の国内旅行が大幅に緩和された(斎藤, 1994)。
- <sup>(11)</sup>宮ノ下と箱根は外国人居留地横浜と首都東京に物理的に近かったことが鉄道道路、チェアーなどアクセシビリティの増加とともに、訪問客を増大させる結果となった。しかし、東海道線などの国鉄の開通と延長は、宮ノ下や箱根と東京・横浜とのアクセシビリティを高めると同時に、東京、横浜から遠隔地にあるが、日光や軽井沢など標高の避暑地を発達させる原因ともなった。日本で高原保養地として発展したのは既存の宿泊施設が存在したところに限られていた(斎藤, 1994)。
- <sup>(12)</sup>擬洋風建築は、幕末から見られた日本人独自の手になる洋風建築を指す。1876年長野県の開智学校が有名。明治

20年代以降は見られなくなる。

- <sup>(13)</sup> 帝国ホテル（1990a）『帝国ホテル百年史』株式会社帝国ホテル（1990b）『帝国ホテル百年の歩み』株式会社帝国ホテル（2010a）『帝国ホテルの120年』。
- <sup>(14)</sup> 富士屋ホテル（1938）『回顧60年』。富士屋ホテル（1958）『富士屋ホテル80年史』（砂本解説（2020）：社史で見る日本経済史 第百三巻）ゆにま書房、634p。また、部屋の詳細などは山口由美（2015）『箱根富士屋ホテル物語』小学館を参考にした。
- <sup>(15)</sup> 昭和5年（1930）年ごろから行われるようになり、『WE JAPANESE』として第1巻1934年、第2巻1937年、1949年に第3巻を刊行された。
- <sup>(16)</sup> 山本によると欧米の新聞では、王室や貴族、富裕層などの著名人のイレズミが注目を集めており、オーストリア皇位継承者であったフェルディナンドも、1893年に富士屋ホテルで龍のイレズミを4時間ほどかけて入れた（山本、2021）。
- <sup>(17)</sup> 近江（2014）は、吉田鉄郎の東京中央郵便局（1931）を典型とする合理主義建築に対して、東京帝室博物館（1937、渡辺仁設計）、九段軍人会館（1934、川元良一設計）のように時代に迎合する風潮のなか注目を浴びた。こうした国粹主義の高揚期に来日したのがB・タウトで、彼は伊勢神宮や桂離宮などを賞賛することによって、伝統的な日本美への回帰を促進する役割を果たした。近江栄（2014）：『日本建築』『世界大百科事典』平凡社（ジャパナレッジ版）。
- <sup>(18)</sup> 勝木・篠野（2001）によると、洋式とは一回ごとにバスを変えることをさし、和式とは同じ湯に複数の人々が入浴することを指していたと思われる。各部屋に浴槽を設置することは多大な設備投資が必要であり、経営上、得策とは言い難い側面もあった。そのため、各部屋に浴室があるホテルの多くは大きな資本をもつ企業であり、共同浴場は個人経営のホテルに多く見られた。

- <sup>(19)</sup> 14ホテルのうち5ホテルに和室、8ホテルで和食（朝食）を提供している。また「純洋式」（帝国ホテル、ステーションホテル等）、「洋式」（東洋ホテル）、「和洋両式」（ホテル芳千閣）など、記載方法も多様で、ホテルがすべて洋式といえなかった状況が推測される。
- <sup>(20)</sup> 「長年にわたって積み重ねられてきた建物の特徴と価値を最大限に引き出せるよう維持と更新」（富士屋ホテルHP「改修」）など、歴史性を引き継いだ改修が行われた。富士屋ホテルHP〈<https://www.fujiyahotel.jp/reborn/renewal/>〉（2022.11.1）。
- <sup>(21)</sup> メインロビーに面したラウンジの壁面を飾る多田美波のクリスタルガラスのブロックによる「黎明」をはじめ、同ラウンジバーの壁面を彩る陶芸作家加藤卓男が制作した志野焼タイルを用いた。また大宴会場孔雀の間では3方の壁面に孔雀の羽を表したつづれ織りをめぐらせた。担当したのは第2新館建設時にも作品を提供した龍村美術織物であった。
- <sup>(22)</sup> 特集に取り上げられた主要ホテルの茶室の立地・庭園を調査すると下記となる。帝国ホテル（4階・屋上庭園）、オークラ（7階・屋上庭園）、センチュリー・ハイアット（6階・付属庭園）、京王プラザホテル（10階・庭園無）、新高輪プリンス（3階・屋上庭園）、ニューオータニは日本庭園の茶寮及び7階（和風棟）の立地に、庭園と屋上の庭園があった。（株）淡交社（1983）『ホテルの茶室案内』『なごみ』8月号、3-37ページ。
- <sup>(23)</sup> 帝国ホテルは2029年～2036年に段階的に完成予定の建て替え計画を発表している。帝国ホテル「2036年に完成予定の帝国ホテル 東京 新本館 デザインアーキテクトとして ATTA・田根剛氏の起用を決定」〈[https://www.imperialhotel.co.jp/j/company/release/pdf/211027\\_news\\_release.pdf](https://www.imperialhotel.co.jp/j/company/release/pdf/211027_news_release.pdf)〉（2022.1.31）
- <sup>(24)</sup> 観光学においては常に観光経験や観光

対象が本当に「真正」なのかが常に問われてきた。観光の真正性が政治的・経済的・文化的な文脈の中で生み出されつつそれらが再帰的に介入することがあると指摘されている。高岡文章（2021）「真正性」『観光学ガイドブック—新しい知的領野への旅立ち』ナカニシヤ出版pp.108-113。など。観光における文化は特定の文脈の中で扱われることがあり、常に客観的な資料批判が必要だといえよう。

- <sup>(25)</sup> 国際エコラベル「GreenKey」のガイドラインの「9.室内環境」（9.6項）では、下記のように述べている。「建物の増改築と新築の際にはサステナブルな方法を取り、伝統的および現代的な地域文化の要素を取り入れるなど、地域に根ざしたものとすること。増改築と新築の際には、関連する法制度を遵守します。できるかぎり地域の資材、技術、道具などについて伝統的な知恵を取り入れることが推奨されます。また、地域の知的財産権を尊重しましょう。審査の際には、持続可能な取り組みの一環として地域資源、地域文化への配慮があること、また、増改築と新築について地域の知的財産権が侵害されていないことを提示してください。」JARTA〈<https://jarta.org/greenkey/>〉（2023/1/31）

## 参考文献

- ・明石信道（2004）『フランク・ロイド・ライトの帝国ホテル』建築資料研究社、45ページ。
- ・犬丸徹三（1964）『ホテルと共に七十年』展望社、530ページ。
- ・内田彩・高橋祐次・山中左衛子（2022）「旅館の諸相と変遷」『日本国際観光学会』、29、35-45ページ。
- ・運輸省（1946）『日本ホテル略史』253ページ。
- ・大久保あかね（2013）「日本旅館の発達過程における接遇形態の研究」『第28回日本観光研究学会全国大会学術論文

- 集』、181-184ページ。
- ・大野正人（2019）『ホテル・旅館のビジネスモデル—その動向と将来』、現代図書、3ページ。
  - ・岡本伸之（1979）『現代ホテル経営の基礎理論』柴田書店、231ページ。
  - ・勝木祐仁・篠野志郎（1999）「大正・昭和初期におけるホテルの概念の展開」『日本建築学会計画系論文集』、64（520）、305-31ページ。
  - ・勝木祐仁・篠野志郎（2000）「大正・昭和初期の著作に示されたホテル建築の計画理念」『日本建築学会計画系論文集』、65（538）、211-218ページ。
  - ・勝木祐仁・篠野志郎（2001）「明治・大正・昭和初期の東京に建設されたホテルの客室及び浴室の種類とその構成」『研究報告集II、建築計画・都市計画・農村計画・建築経済・建築歴史・意匠』、71、581-584ページ。
  - ・(株)清水組（1936）『ホテル建築集』共同印刷、372ページ。
  - ・(株)淡交社（1983）「ホテルの茶室案内」『なごみ』8月号、3-37ページ。
  - ・(株)帝国ホテル（1990a）『帝国ホテル百年史』1012ページ。
  - ・(株)帝国ホテル（1990b）『帝国ホテル百年の歩み』266ページ。
  - ・(株)帝国ホテル（2010a）『帝国ホテルの120年』299ページ。
  - ・(株)帝国ホテル（2010b）『帝国ホテル写真で見る歩み』91ページ。
  - ・(株)名古屋観光ホテル『名古屋観光ホテル50年史』372ページ。
  - ・(株)ロイヤルホテル（2005）『RIHGA ROYAL HOTEL1935-2005』89ページ。
  - ・木村吾郎（2006）『日本のホテル産業100年史』明石書店、384ページ。
  - ・(公財) 渋沢栄一記念財団渋沢資料館（2014）『渋沢栄一と帝国ホテル—実業家たちのおもてなし』87ページ。
  - ・斎藤功（1994）「わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根—明治期を中心に」『人文地理学研究』、XVIII、133-161ページ。
  - ・佐藤大祐・斎藤功（2004）「明治期の外国人による避暑慣習の伝播と高原避暑地の形成」『日本地理学会発表要旨集』、46ページ。
  - ・澤護（1996a）「横浜居留地のホテル史（1）（1859-1899）」『敬愛大学研究論集』、50、305-311ページ。
  - ・澤護（1996b）「横浜居留地のホテル史（2）（1859-1899）」『敬愛大学研究論集』、51、167-221ページ。
  - ・砂本文彦（1998）「1930年代の国際観光政策により建設された「国際観光ホテル」について」『日本建築学会計画系論文集』、63（510）、235-242。
  - ・砂本文彦（2008）『近代日本の国際リゾート：一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、623ページ。
  - ・田梨由太郎（1923）『帝国ホテル』洪洋社、26ページ。
  - ・竹谷年子（1987）『客室係が見た帝国ホテルの昭和史』主婦と生活社、212ページ。
  - ・徳江順一郎（2020）『「ライフスタイル・ホテル」の出現におけるマーケティング上の意義』現代社会研究、17、93-102ページ。
  - ・仲谷秀一、テイラー雅子、中村光信（2016）『ホテルビジネスブック第2版』、中央経済社、160ページ。
  - ・橋寺知子・川道麟太郎（1991）「「帝冠様式」について」『建築年報』、917-920ページ。
  - ・箱根町教育委員会（2013）『箱根の近代建築 富士屋ホテル』30ページ。
  - ・初田亨（1983）「外国人旅館（築地ホテル館）の建築について」『日本建築学会論文報告集』、331、130-138ページ。
  - ・富士屋ホテル（1938）『回顧60年』303ページ。
  - ・富士屋ホテル（1958）『富士屋ホテル80年史』（砂本解説（2020）：社史で見る日本経済史 第百三巻）ゆにま書房、634ページ。
  - ・前田勇（2002）「旅館の特徴としての“曖昧性”に関する分析」『立教大学観光学部紀要』、4、1-18ページ
  - ・村岡實著（1981）『日本のホテル小史』中央公論社、372ページ。
  - ・村井弦斎（1903）『食道楽。秋の巻』報知社、318ページ。
  - ・山口由美（2015）『箱根富士屋ホテル物語』小学館
  - ・山本芳美（2021）「「日本みやげ」としてのイレズミ：十九世紀から二十世紀初頭における外国人観光と彫師」日本研究、63、43-83ページ。
  - ・和風建築社（1986）『村野藤吾和風建築作品詳細図集2 ホテルの和風建築』建築資料研究社、208ページ。

【本論文は所定の査読制度による審査を経たものである。】